

徹底ルポ

無縁社会「孤独死」の

現場を歩く

ジャーナリスト
新郷由起

遺体にたかるウジ、ゴキブリ、カツオブシムシ…。
部屋は鑑識官が失神するほど腐臭に満ちていた

普通の家庭で起きる

うず高く積まれたコンビニ弁当のトレーや、黒ずんだ汁が残る多数のカップ麺容器。レジ袋が散らばるゴミの山と化した室内には、扇風機などの壊れた電化製品と埃を被った電話機が佇む。酒瓶やペットボトルが



「孤独死」した男性の部屋（下も）

転がり、カビの生えた壁、足の踏み場もない床のあちこちからゴキブリが飛び出て来る。どの水周りも長く掃除した形跡がなく、水垢がこびり付き、脳を突き裂くほどの酸味を帯びた臭気が部屋一帯に漂う――。

「孤独死」とされる現場で幾度も見て来た光景だ。

単身居住者が誰にも看取られず、一人で死を迎える「孤独死」は、全国で年間三万人にも上るとされる。

ただし、現下では厳密な定義がなく、状況も多岐に渡るため、公式のデータは乏しいが、「圧倒的に男性

が多い」が、関係者一同の一致する見解だ。

その言葉の響きから一般に、ほとんどが体力の衰えた「お年寄り」であるのか、ように把握されがちだが、

五十〜六十代男性が突出して多い実態がある。事実、

六年前に東京都監察医務院が性差・年代別に公表した「単身者・自宅内での死

亡」件数においても、トップは六十代男性で総数の二割を占め、次点の五十代男性を合わせると全体の三分の一、続く七十代男性を含めると実に半数に上る。

なぜ、平均寿命(七十九歳)にも満たずに、多くの壮年男性が独りで逝くのか。

神奈川県に住む四十四歳男性は、四年前に父親(享年

誰にも看取られず、その死に気付く者もない。発見された時には無残な有様に。そんな「孤独死」が大きな社会問題となっている。多くの現場に足を運ぶ中で直面したのは「ごく普通の人々」が最期を迎える姿だった――。徹底取材で浮き彫りになった現代の生と死。